第二章　蛇抜け

第一章では、天竜川の洪水そのものにかかわる災害の伝説を見てきました。それらの伝説の内容で注目されるのは、子泣き石で代表されるように、洪水の際に大きな石が運ばれたことです。天竜川が大洪水を起こすような時には、当然のことながら大雨が降りました。この雨は周囲の山々にも降り、天竜川の支流から本流に向かって洪水が起きましたが、その多くの場合、水だけでなく土石流となりました。

すなわち、伊那谷の東西には南アルプスと中央アルプスの高山が連なっていますが、そこから最も低い天竜川をめがけて周囲に降った雨が流れ込んだのです。その上、両アルプスは花崗岩質で保水性に乏しいため、水の出は急でした。それに花崗岩の風化したものは崩れやすく、土石流になりやすかったのです。こうして、天竜川が洪水に見舞われるような時には、たいてい土石流が伴いました。むしろ天竜川の支流の洪水の被害のほとんどは、土石流といってもよいぐらいなのです。天竜川の水害を考えるには、土石流災害を欠くわけにはいきません。

この土石流のことを、この地方では蛇抜(じゃぬ)けと呼んでいます。本章を通じて考察するように、この名前自体に大きな意味が隠されていることは間違いありません。そこでこの章では天竜川の洪水とともに、その支流からもたらされた蛇抜けの伝説を、北から南へと追っていきたいと思います。

(一)　沢底の蛇の池（長野県上伊那郡辰野町朝日沢底）

沢底の山寺に堂平という所があり、昔ここにお寺があったが、いつの頃からか廃寺になってしまった。

この堂平に蛇の池とよぶ小さいが底無しの池がある。昔、この池に大蛇が住んでいたが、大雷雨で山抜けしたとき、一緒に流れて行衛がわからなくなった。池から七、八間離れたところに蛇ヌケといって、蛇の抜け出した跡だというところがある。この池を掻きまわすと雨が降ると言って、誰も昔から手を出した者がいないという。―（『長野県　上伊那誌』民俗篇上一四三一頁・上伊那誌刊行会・一九八〇）

辰野町の沢底の堂平に蛇の池と呼ぶ小さい底無しの沼があり、昔ここに大蛇が住んでいたが、大雷雨で山抜けした時、一緒に流れて行方が分からなくなった。池から七、八間はなれたところに蛇抜けといって、蛇の抜け出したあと

だという所がある、これが伝説の内容です。

伝説では大雷雨で山抜けした時、大蛇は一緒に流れ出し、しかも蛇の抜け出したあとは蛇抜けと呼ばれているといいます。これまで述べてきたことからも明らかなように、この山抜けは土石流です。そしてその跡が蛇抜けなのです。この伝説ではあまり明確に出てはおりませんが、蛇が池から抜け出したので蛇抜けになったというのが、蛇抜けという名称からもわかる理解なのです。そしてこの蛇抜けをするために、大蛇は大雷雨を呼んだのです。換言するならば、この大蛇は水を司り、雷雨を呼ぶことのできる特別な能力を持っていたのです。伝説の後半部に、この池を掻き回すと雨が降るからといって、誰も昔から手を出さないといっているのは、この大蛇の持っていた水神としての能力につながるものといえます。

この話は、前章で見た天竜川の災害伝説の（一）（一三）とも関係しています。大蛇、竜は水の神であり、水を司り、場合によると蛇抜けや洪水などを引き起こすと考えられていたわけです。

（二）洞ケ入鐘楼堂（上伊那郡辰野町上平出）

上平出部落の南端、地名大門を東の山の谷間に入ると約二町、山の中腹が鐘楼堂のあった所である。昔、その所から山抜けをして、鐘楼堂は泥砂と共に押し流され、釣鐘は天竜川の百々の淵にころびこんで大蛇となり、淵の主となったという。―（『長野県　上伊那誌』民俗篇上一四四九頁・上伊那誌刊行会・一九九〇）

この伝説では山抜けと出てくるだけで、蛇抜けとは出てきません。しかしながら、鐘楼堂が山抜けにより泥砂とともに押し流され、釣鐘は天竜川の百々の淵に転び込んで竜になったといいます。明らかに竜と洪水との関係が読み取れます。（一）の伝説がある辰野町ということをも加味すれば、この伝説も蛇抜けを下敷きにしているということができるでしょう。

淵に鐘があるのは先に見た第一章（二）の伝説ともつながります。さらに竜と鐘とが深い関係にあり、鐘が雨乞などに使われる事例は広く全国に見られます（笹本正治『中世の音・近世の音―鐘の音の結ぶ世界―』三二頁以下・名著出版・一九九〇）。なおこの点については次章でも触れます。（一）の伝説では、大蛇が住んでいた池の水を掻き回すと、雨が降るといっていますが、ここにも竜は雨の神であり、これを怒らせれば雨が降るという意識が見られます。この伝説に現われる竜に化身した梵鐘には、本来雨を

降らせる能力があると信じられていたのではないでしょうか。

(三) おや子石（上伊那郡高遠町御堂垣外・中条）

ずうっとむかしのことだ。大じしんでな、地山がくずれて、ドドドーッと土砂が、おしだしたと。

地山には、おや子の山犬がすんどったが、おったまげて逃げだしたとさ。さきに母犬が、小犬をつれてな。

あとから追いかけてきた父犬は、ワン、ワン、ほえながら逃げていった。が、御堂垣外まできた時に、藤沢の蛇ぬけにおしながされて、石になってしまったそうな。母犬と小犬は、キャン、キャン、なきながら、どんどん逃げた。けれども、おっかなくて、せつなくて、とうとう中条でな、ぺったりすわりこんだまま、二つの石になったとさ。

それだもんで、父犬の石を「犬石」といい、母犬と小犬の石を「子つれ石」とよんだそうな。それから、

地山おしだす
犬石ほえる。
ないてにげるは、子つれ石。

と、うたわれるようになったとさ。

それらの石は、今はない。道ぶしんにでもつかわれてしまったのかな。―（塚田正公『伊那の民話―信濃の民話5』一四五頁・信濃教育会出版部・一九七六）

伝説は地震のために山が崩れ、山に住んでいた親子の山犬が逃げ出した。父犬は御堂垣外まで来たときに蛇抜けに押し流されて、石になった。母犬と小犬は逃げたけれども、恐怖と切なさで中条において二つの石になったという内容です。

災害の本来の原因は地震ですが、話の展開からしてそれが引き金になって蛇抜けが起こったようです。その蛇抜けによって、山犬が犠牲になり、その象徴として彼らが石になったのです。この伝説は、先に見た洪水の伝説の第一章（七）で市田の出砂原にかかわる市田駅前の山三魚店の裏庭の大石、第一章（八）の子泣き石と共通性をもちます。特に子泣き石とこの伝説では、蛇抜けの記念碑として、蛇抜けによって運ばれた大石が犠牲者の供養と一緒になり、災害を記憶する手段とされていることは注目されます。

(四) 犬石（上伊那郡高遠町御堂垣外）

昔、地山が押し出してきたとき、大石、犬石、子犬石の三個の犬石が鳴いて逃げた。大石（親石）は強いので

地山のすぐ下に止まり、女親石は五〇〇メートルほど離れたところに止まり、子供石は八キロメートルはなれた長藤村の中条という所に止まったという。―（『長野県史』民俗編・第二巻（三）五八三頁・長野県史刊行会・一九八九）

この伝説は先の伝説の異なる形態のものです。基本的内容は変わりませんし、その意義も同じだといえるでしょう。

これまで見てきた蛇抜けの伝説は、蛇抜けが天竜川の支流部分でいかに恐れられていたかを伝えていると思います。蛇抜けという語の説明は色々ありますが、土石流が蛇抜けと呼ばれたことは、大蛇が抜けたことによってこの災害は引き起こされているという理解が底辺にあったのでしょう。前章で洪水が大蛇と関係して理解されたことについて触れましたが、蛇抜けもまた同様の性格をもつものだったのです。

第三章　竜と釣鐘と雨・水

これまで触れてきた伝説によって、天竜川の洪水と竜とが深い関係にあり、その支流で引き起こされた土石流、すなわちこの地方で蛇抜けと呼ばれる災害が、竜＝大蛇によってもたらされるという考え方があったことが明らかになりました。そこで次に、洪水が竜そのものが原因になって起こるという考え方を前面に出した伝説を確認していきたいと思います。

（一）　功徳寺の鐘（茅野市北山湯川）

この先二〇メートルばか先に寺があるんですが、この寺の釣り鐘を、大昔、伝えられている話ですが、盗んで、諏訪市の向こうの岡谷市ですが、岡谷市の小坂観音へ持って行こうとして、ま、盗んだだから、寺のだれもいないときでしょう。そしていって上諏訪から諏訪湖を船に載せていくと、近いわけ。船に載せていったら、非常にいいお天気だったのに、小坂の岸へつく少し手前に、それこそ一天にわかにかき曇り、そして諏訪湖が極端に荒れ